

山浦 清 氏 博士(文学)学位請求論文
『北方狩猟・漁撈民の考古学』
審査報告要旨

山浦 清氏による博士学位請求論文『北方狩猟・漁撈民の考古学』は、氏がこれまで折にふれて発表してきた北方海獣狩猟民、北方系漁撈民に関する諸論文を、一貫した結構をもって編成したもので、全体は大きく3部からなる。

第 部では、朝鮮半島から中国東北部まで目配りしつつ、まず日本列島に視点を当て、早期以降の縄文文化から弥生・続縄文、古墳文化などに見られる、いわゆる北方系漁撈民文化を扱う。列島における漁撈文化のうち、海人などの潜水漁に象徴される南方系漁撈文化のもつ重要性にも着目しつつ、寒流系大型表層魚や海棲哺乳動物を対象とした銛漁に代表される北方系漁撈文化に視点が据えられ、さまざまな角度から論じられる。ここでは、とりわけ北海道南部、恵山文化に発達する銛の系譜についての論議が注目される。

第 部では、樺太(サハリン)、千島列島(クリル諸島)およびカムチャツカ半島、およびそれらによって囲まれる、いわゆる環オホーツク海地域を扱う。ここではとくに、アイヌのサケ・マス用漁撈具として重要なマレクをめぐって、オホーツク海北岸のトカレフ文化について詳細に分析される。

そして第 部では、さらに環極北地域つまりベーリング海峡周辺、アラスカ、北米大陸北西海岸部、グリーンランド、さらにはアムールランドや、遠くスカンディナヴィア半島にまで視野を拡大し、北方系狩猟・漁撈民の活動の痕跡を追い、彼らの生活文化や交易活動の実態に光を当てようと試みる。ここでは、たとえばテューレ文化の東遷に与えたブヌーク文化の意味、カリフォルニアやアムール中流域で発見されたエスキモー銛頭のもつ歴史的意義など、いずれも注目すべき問題が論じられる。

このように、この論文は、その舞台が北方沿海地域であるという点で、また、そこで活躍する人々が狩猟・漁撈民であるという二つの点で、南の農耕民的定住社会、ましてや都市文明からは遥かに遠い。つまりここで研究の対象とされる地域は、二重の意味で、文字史料による歴史といったものから隔絶された、いわば辺境地帯なのである。

しかし、そのような地域にも人類の生活史は、当然のことながら厳然としてあった。山浦氏のみならず、われわれには何とかしてそれを、いささかでも明らかにしたいという願望が胸にある。そしてそれを可能ならしめるのは、関連諸学の協力のもと、専ら物質文化を扱う考古学・民族学であろう。

ところで、考古学で扱う物質文化資料というと、一般には土器・石器といったものがふつうである。この論文でも土器はたとえばオホーツク文化など北海道島の編年の基礎として扱われてはいるが、むしろ氏がこれら一連の研究において、壮大な謎解きの鍵として追いつけたのは、これら広大な海域で伝統的に使われた、長さわずか数センチの骨角製の狩猟・漁撈具「回転式離頭銛」である。これは、そもそも物質文化の乏しかったこの地域にあって普遍的に使用され遺されたものであり、しかも可塑性・造形性に富む土器に比して、いわば機能本位の道具であるから、彼らの社会のいわゆる下部構造を明らかにするには、むしろ好都合といってよい。そして本論文では、そうした操作が見事に成功している。

じっさい、この地域では、17・18世紀以降のヨーロッパ各国による北氷洋(北極海)を中心とした本格的捕鯨活動が活発になるまでは、他者による文字記録はもとより、ほとんど歴史的痕跡は残されていない。したがって、住民じしんの経済活動の中心であった銛漁の実態を考古・民族学的に明らかにすることが、この地域の歴史を明らかにする、ほぼ唯一の手段といわねばならない。

こうした、地味ながらまさに独創的で綿密な調査研究は、ここで見事に成功を収め、古代文明の周辺に生きた知られざる人々の歴史を垣間見せるのに成功している。手堅い考古学的手法を駆使しつつ、人類史の再構成に向けて新しい地平を切り開いたこの業績は、他に類例のない画期的で貴重な論文といえよう。

もとより、些細な点でいくつか瑕疵が見られないわけではなく、また、既発表の論文を再構成した場合にありがちな構成上の不統一も全くなしとはしないが、論文全体の内容的価値をいささかも貶めるものではない。

以上のとおり、本論文が早稲田大学の授与する博士(文学)の学位に十分ふさわしい内容の研究業績であると認める。

以上

2005年1月15日

主任審査委員 早稲田大学教授 文学博士 菊池徹夫
早稲田大学教授 高橋龍三郎
筑波大学教授 博士(文学) 前田 潮